©Makoto Kamiya

第219回定期演奏会　幻想と色彩

2026年7月11日（土）　13：45開場　14：30開演
指揮/角田鋼亮(音楽監督)
ムソルグスキー：音詩「聖ヨハネ祭前夜の禿山」/交響詩「禿山の一夜」（原典版）
ドヴォルザーク：交響詩「真昼の魔女」Op.108B.196
ボロディン：交響詩「中央アジアの草原にて」
ドビュッシー：交響詩「海」管弦楽のための3つの交響的素描

〈ゴー・トゥ・ザ・セントラル〉をテーマとして新シーズンを展開している定期演奏会、来月の次回定期（7月11日）には、我らが角田鋼亮音楽監督が登場します。シーズン幕開けの定期では楽団初挑戦のマーラー・交響曲第5番を取り上げ、視野も広くしっかり丁寧に大編成作品を響かせて喝采を浴びたばかりですが、次回は〈幻想と色彩〉をテーマに、趣向をがらりと変えたプログラムをご用意しています。オーケストラが、これほどに多彩な色を響かせるのか!と驚かされる音世界、その広さと鮮やかさに出逢っていただきたいと思います。

◆粗っぽさこそが魅力！―― 夏至の前夜に現れる、闇の精霊たち

次回定期の幕開けは、ロシアの作曲家モデスト・ペトロヴィチ・ムソルグスキー（1839～1881／《展覧会の絵》でも有名ですね）の音詩《聖ヨハネ祭前夜の禿山》（1867年）。タイトルだけでは何のことやらですが、怪奇な幻想が飛びかう面白い作品です。

〈聖ヨハネ祭〉とは、キリスト教の一部で祝われる日で、ヨーロッパ各地では古代からの夏至祭と結びついてさまざまな行事もおこなわれてきました。そんな〈聖ヨハネ祭〉の前夜には、魔物や精霊が現れたりと不思議な出来事が起こる、という言い伝えもあるそうで、ムソルグスキーの本作はその伝承から想像をふくらませて、オーケストラのための音詩（交響詩とほぼ同意です）に描いたもの。荒れた禿山（草木が生えず岩肌も剥き出しになった山のこと）を舞台に、それまで地下に潜んでいた闇の精霊たちが、チェルノボーグ（スラヴ神話に出てくる〈黒い神〉）に率いられて現れ、妖しげなサバト（魔の宴）を繰り広げ・・・・という情景が、オーケストラの荒々しく鬼気迫る表現で響き描かれるのです。

ところがこの曲、ムソルグスキー生前には演奏されず、埋もれたままでした。ワイルドな迫力を生で叩き付けてくるようなその音楽は、当時はあまりに異質で粗野な表現に過ぎると感じられたらしいのです。作曲家はその後もこの作品を基に何度か書き直しているのですが、やはり埋もれたまま。―― ムソルグスキーが斬新で大胆な創作が広く認められぬまま酒に溺れて亡くなってしまったのち、彼の才能を惜しむ作曲家リムスキー=コルサコフが、原曲の奔放な表現をすっきりと整理してオーケストレーションも（彼なりの洗練された形に）書き直し、交響詩《禿山の一夜》として発表してからようやく人気を博し、今に至るまで盛んに演奏されるようになったのです。

つまり、次回お聴きいただくのは、有名な《禿山の一夜》の原典版、というわけです。リムスキー=コルサコフ編曲版をお聴きになったことがあるかたは、相当以上の違いにびっくりされるかと思います。オーケストラの響きも構成も、敢えて粗野な迫力で押し通していますし、編曲版では暁を告げる教会の鐘の音で闇の精霊たちは退散、静かな夜明けが訪れるのですが、こちらの原曲版では夜明け前の饗宴のまま終わります。このあたり、詳しくは当日の楽曲解説で・・。

◆魔女は昼間に現れる ―― ドヴォルザーク晩年の、色彩も迫力も美しい交響詩！

夏至の前夜、禿山で妖しく暴れ回る〈黒い神〉が率いる地下の精霊たちに続いて・・・・、次の曲は、同じくスラヴの神話・民話に現れる魔女をモティーフにした傑作です。チェコの国民的大作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）晩年の交響詩《真昼の魔女》（1896年）は、アメリカに招聘された折に望郷の想いをこめて書いた有名な交響曲第9番《新世界より》の数年後、チェコに帰国してから作曲した一連の交響詩、《水の精》《真昼の魔女》《金の紡ぎ車》《野鳩》と、詩人エルベンのバラード（譚詩）による作品のひとつです。

お母さんから「良い子にしていないと、真昼の魔女に連れてってもらうよ!と注意された男の子。言いつけを守らずにいると、なんと本当に魔女が現れます。慌てて逃げ出す母子ですが、ふたりを追いかける魔女。そして悲劇が・・・・

ドヴォルザーク練達の表現が、ボヘミア民話風の物語世界をドラマティックな起伏と共に響かせるさま、同じ魔女を題材にしながらムソルグスキーと対照的なその抒情美と、迫力の色の違いをお愉しみください。

◆必要最小限の音から、遥かに広がってゆく音風景と〈空気感〉 —— ボロディンの天才的小品

ムソルグスキーが、敢えて粗削りな響きで迫ってみせた闇の霊たちの世界。そしてドヴォルザークがぬくもりから恐怖まで練達の表現で描いてみせる、母子と魔女の遭遇と悲劇‥‥。西スラヴ（チェコなど）と東スラヴ（ロシアなど）とで違いはあれど、同じスラヴの伝承を基にした2作の音詩／交響詩で、オーケストラの色彩感や音の感触もずいぶん異なることを体感していただいた次には、オーケストラ表現をぐっと（的確に！）削ぎ落として、必要最小限の筆はこびでカラフルな画面を創り出してみせる傑作をお聴きいただきます。

ロシアの作曲家アレクサンドル・ポルフィリェヴィチ・ボロディン（1833〜87）が作曲した《中央アジアの草原にて》（1880年）は、ロシア帝国の皇帝・アレクサンドル2世の在位25周年を祝う催しで演奏されるために書かれたもの。この皇帝の治世で、ロシア帝国はコーカサスなど中央アジアへ版図を広げたのですが、そうした〈帝国の領土拡大〉という当時の情勢を背景に、この曲にも〈ロシアとアジアの交わり〉が表現されています。—— 曲の冒頭、遥かに広がる中央アジアの草原を思わせるような静かな響きの中に歌われる、素朴なロシア民謡風のメロディ。馬やラクダの足音にのせて現れる2つめのメロディは、ちょっと東洋風の薫りを帯びたキャラバン（隊商）のテーマ。やがて、ロシアの歌と隊商の歌は重なり合ってひとつのハーモニーをつくり‥‥遥か彼方へと消えてゆきます。

目下の世界情勢を思うと、当時の〈帝国〉的な視点があまりにものどか過ぎるように見えるのはさておき、この曲が凄いのは、組み立ても筆致も無駄なくシンプルの極みであるのに（であるからこそ！）、眼前に見えてくる音風景が本当に広々として、そこにたしかな〈空気感〉まで立ち現れてくること。これは、ホールでの生演奏で驚いていただきたいと思います。

◆幻想美と色彩がさかまき、うねり続ける〈音の海〉を生きる —— ドビュッシー《海》の驚異！

そして最後は、《中央アジアの草原にて》の空気感とはまた対極の音世界です。オーケストラの繊細でカラフルな表現力を素晴らしく多彩に広げていった傑作 —— フランスの作曲家クロード＝アシル・ドビュッシー（1862〜1918）の〈《海》—— オーケストラのための3つの交響的素描〉（1903〜05年）です。

副題に、オーケストラによる素描（エスキス／絵画を制作する下準備のスケッチ）と題されているあたりもみそで、コンサート前半でお聴きいただく詩的な物語とは対照的な時間が紡がれてゆきます。3つの楽章には、《海の夜明けから正午まで》《波の戯れ》《風と海の対話》と詩的なタイトルがついているのですが、実際の海の情景をそれらしく表現するわけではありませんし、なにかお話があるわけでもありません。むしろ（それこそ、永遠のようにうねり続ける大海原を眺めているときのように）緻密に磨き込まれた音と響きのニュアンスが生まれ、ぶつかり、重なり合ってゆくうちに膨大なイメージが広がってゆく‥‥その時間のうねり、常に変化し続ける〈音の海〉を生きる体験‥‥と言ったほうが近いかも知れません。

オーケストラのサウンドも、実に豊かな幻想美のさかまく色彩の海。長調・短調の響きより、古くからある様々な旋法の色あいや、ペンタトニック（東洋をはじめ各地の民謡にも用いられる5音音階）などを生かしながら、多彩なハーモニーがゆらめき、波うち、煌めきのしぶきをあげます。

繊細夢幻に薫りたつ色彩を、聴覚の喜びへと自在に響かせる傑作‥‥大編成を駆使した本作への挑戦は、セントラル愛知交響楽団にとっても表現力を広げる大切な経験となるでしょう。未知の海原へと果敢に航跡を伸ばしてゆくオーケストラの、瑞々しい〈いま〉を、ぜひホールでご一緒に！

やまの たけひろ
山野雄大

Profile

ライター［音楽・舞踊評論］。『レコード芸術 ONLINE』『バンドジャーナル』『音楽の友』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターほか、CDや公演の解説、歌詞対訳、朝日カルチャーセンターでのバレエ音楽講座など多数。レイディエート・フィル正指揮者をはじめアマチュア・オーケストラの指揮も。